

鏡の裏を見る



宮原紀昭

すいそうすいそうすいそうすいそ

鏡に映る自分の姿は、ほんの一部で、鏡の裏には自分の見えない部分が数多く隠されているものである。こ

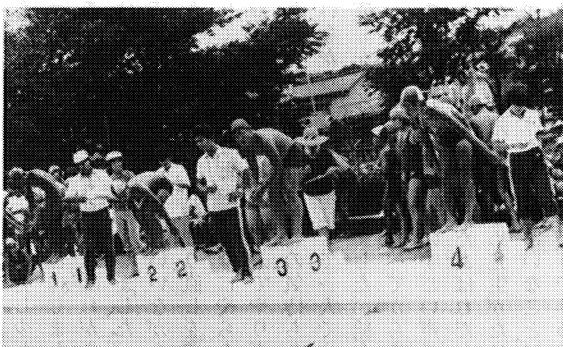
れと同じく、どの子供も磨けば磨くほど、光り輝く素質をもっているはずである。それを見い出し、磨いてやるのが私たちの職務であり、使命である。

若ければ、若さというなにも増してすばらしい熱意がある。しかし、「光っている」といわれる年になつた私は、熱意だけでは子供たちに受け入れられるものではない。指導技術や指導方法のうまさだけに頼つてもすむものではない。「心の和」をもつて一人一人の子供の中に入つていかなければ、個々の素質も可能性も見い出してやることはできないだろう。

子供たちが「光っている、光っている」とこそそ話しているのを耳にするようになつたのは、原二小の六年を担任してから数週間たつたころであつた。「なにが光っているのだろう」とあまり気にもとめずにいたが、度々その言葉を耳にするので少しずつ気になるようになったある日のことである。子供たちが、いつものように私のまわりを囲み、様子をうかがつてゐる。そのような様子は「光っている」ということを耳にしてから何度もあつたので、子供たちのようすをそつと観察していくと、一人の女の子が私の後ろに立ち、「やつぱり」という声をだした。

「光っている」ということに気づいたのは数年前、娘と水泳をしていると

き、妻が後ろから撮つた写真であつた。しばらくの間は、その言葉はすい分気になる言葉であつたし、頭に手がいく度に「そんなに髪が薄くなつたのか」と妻に問うこともしばしばあつた。しかし、鏡に写る自分の姿に光っている様子は少しも分からぬ。いつしかあまり気にもとめなくなつていていたやさきに子供たちから指摘されたのである。少女は少しも分からぬ。しかし、事実は事実である。そのことをいわれても気にしてはいけない。「みんなを受け持つ男の先生は、みんな光っている先生ばかりだな、先生もその一人だね」と、子供たちはくすつと笑つた。その後、子供たちのひそひそ話、「光つていい」ということを耳にしなくなつた。



記録更新への挑戦

すいそうすいそうすいそうすいそ

鏡に映る自分の姿は、ほんの一部で、鏡の裏には自分の見えない部分が数多く隠されているものである。こ

れと秋風が吹き始め、まもなくプールじまいが近づいた水泳の時間のことである。一学期までは、あまり水泳が得意でなかつたKは、その日はなんとなく張り切つてゐる。本時のねらいは速さよりも、距離への挑戦である。校内水泳大会では選手になれなかつたKは、この日を待つていたようにスタート台についた。笛の合図で、次々に飛び込み泳ぎ始めた。一人また一人と落後していくなかで、黙々と泳ぎ続ける。そのうち学級の子供たちは、一人、二人と

プールサイドに歩み寄り、ついには学級全員で「ほら三百だ、四百だ、がんばれ、がんばれ」と声をかける。ついに五百メートルを泳ぎきつた。呼吸も乱れず、まだ泳げたのにといった顔をして上がつてきた。

次の日から、Kはひとが変わつた。今までは、学習は遅れがち、毎日提出しなければならない課題はほとんどしなかつたのに、その日を境にまるでひとが変わつたように努力するようになつた。後頭部がしぜんに光を増すようなわけにはいかないが、教職にたずさわる者の使命をいつそう自覚し、教師として少しでも成長するよう努力していきたいと思うこのごろである。